
おそらにハッキング

祭永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おそらにハッキング

【Nコード】

N2912U

【作者名】

祭永

【あらすじ】

この世の中が嫌いでこの世の中に復讐を企む人がある。

そんなことは知らない悪戯好きの高校生ハッカーが修学旅行の際に飛行機の中でトラブルに巻き込まれてしまう。

その時、彼がとった行動は？

プロローグ（前書き）

処女作で、初投稿です。

まだまだ未熟なところはありますがよろしく願いします。

ブローグ

——僕はこんな腐ったような社会が嫌いだ。

あんな腐ったような政治家達や大人になんかなりたくない。

僕が今ひきこもっているのもこんな社会のせいだ。

だから僕はこの腐った社会をめちゃくちゃにしてやろうと決めた。
——

時計の針がチクタクと一定のリズムで進んでいく。

すると親が料理を持ってきたみたいだ。

親はなにか言ってるみたいだけど、でも僕には聞こえない。理解したくないのかもしれない。

親がいなくなるとなぜか少しほっとする。そして思う。

——僕をこんなふうにした親も嫌いだ。——

飯を食べた後に計画を進めるためにすぐにパソコンの前に向かう。

あるシステムに侵入しようとするパソコンの画面に『Pass Word』と文字が映し出される。

パスワードの解析ツールが入っているUSBメモリをパ

ソコンに差し込み、
解析ツールをインストールする。

『AKS O u f e f R d f f F J D g d E D J I J r g V W D H U
J I W……』

大量の文字の組み合わせががものすごい速さで画面に映っていく。

ピンと小さな電子音になり、画面には、『v o l a r e』
という文字が映し出された。

Enterキーを押す。

すると

『A c c e s s……OK』

と文字が画面に映し出される。

「よし、思ったより簡単にアクセス出来たな」

正直ここまであっさり侵入できるとは思ってなかったので、
少し拍子抜けしてしまったがまあいい。
後は、このウィルスを入れてしまえば、
このシステムを自分の思い通りにコントロールできる。

——これから僕がこの世界を壊してやる。——

いたずら

『ジリリジリリ』と目覚まし時計の音が鳴る。

この不快な音で俺は起きる。

「もう朝か……」

しかしこの音を聞くと少し憂鬱になってしまう。不快な音を消すためにすぐに目覚まし時計のボタンを押す。

しかし、朝気持ちよく寝ているときに、この音を聞くのは黒板を爪で引つ掻く音と同じくらい不快だ。とはいってもこれがなきゃ起きれないんだよなあ……

目を擦りながら洗面所に向かう。

そしてまだ寝起きで夢と現実の間をさまよっている意識をはつきりと現実に戻すために冷水で顔を洗う。

その後にはトーストと目玉焼きを食べてすぐに学校の用意をする。

まだ学校に行くまで、まだ少し時間があるので、ノートパソコンの電源をつけてネットでニュースを見ているとある記事を見つける。その記事を見て「えっ」と大きな声を出してしまった。

——『図書館のデータベースが一時的に利用不可能に……』——

これは前に興味本位で『いたずら』で図書館のデータベースの情報を少しいじったんだけど、ここまで大事になるとは思わなかった。

だんだん少し罪悪感と不安が襲ってきた。

——こういう『いたずら』は前からよくしている。
といつても特に理由なんか考えたことないけれど。
敢えて理由を考えるなら、こういう『いたずら』をやるとネット
上ではスーパーハッカーなどと呼ばれるのが、なんだか少し嬉しい
からかもしれない。——

しかし今まで『いたずら』をしていたが、ニュースどころか、ア
クセスしているのがばれた形跡も無いので今回は少し驚いた。「ま
あ足跡がつかないようにしていないし……」

だからそう簡単に警察に捕まるなんてこともないから大丈夫だろ
う。と楽天的に考えることにした。
でもこれからは少し自重しよう。

ふと時計を見ると、そろそろ家を出て学校に行かないといけない
時間だ。

ノートパソコンを閉じて、急いで家を出る。

修学旅行、一ヶ月前―平和な日常（1）―

「はあ……」

別に学校は嫌いなわけじゃないが、学校に行くまでの道のりは少し憂鬱になる。多分その理由は、この長い坂としかもそれに加えて、この夏の暑さである。たしか今日の天気予報では、38度だったような……

家から学校までバスでもあればいいのに……

「あーシンイチロウおっはよー」

朝から元気な声が聞こえてくる。

「ああ、おはよう」と小さな声で言う。

「朝は相変わらず酷い顔ね、もうちょっとしゃきっとしたらどう?」

「うるさいなあ……」

こいつは幼なじみの古川 ミキだ。

こいつは、普段地味な俺とはタイプが逆で、明るく、活発でいつもみんなの輪の中心にいるような奴だ。

しかし正反対のタイプのやつとこうして学校までの道のりをいっしょに歩いているってのは、なんだか 少し変な気分である。

「そういえば宿題やった?」

あ、忘れてた……

その言葉を聞いた瞬間、ただでさえ朝は憂鬱な気分になってるのに、宿題のことを思い出すと頭が痛い。

「はあ……」

俺がため息を大きく吐くと

「やっぱりやってないんですよ。」ミキが呆れながら言う。
「なんだよお前には関係ないだろ。」

「まったくしょうがないわね。」

と言うと、鞆の中からノートを取り出して、俺に差し出した。

「宿題うつしてもいいわよ。」

「えっ、マジでいいの？」

その時、いつもは口うるさい幼なじみが天使に見えた。

しかし、「これは、貸しだから、後でなんかおごってもらうからねー」と

小悪魔のような笑み浮かべながら、小走りで先に行ってしまった。

まあ、そんなうまい話なんかないよなあと心の中で呟きながら彼女を追いかけた。

修学旅行、一ヶ月前―平和な日常（2）―（前書き）

こんな小説でも見てくれる人が居るのは、嬉しいです。

修学旅行、一ヶ月前―平和な日常（2）―

この長い坂をやつとのことで登り終えて、俺が少しバテているのに対してミキは疲れた様子もなく元気だ。部活などで鍛えているからなんだろうなあ……

学校に着くと

「私は職員室に用があるから」

と言ってミキは職員室のほうに向かってしまった。

教室に入ると、いきなり

「リア充爆発しろ」

意味の分からないこと言いながら、誰かが猪のように突進しながら右ストレート放つて来る。それを咄嗟によけると突進してきたからか、たまたま俺の左手が相手の急所にクリーンヒットしてしまった。

「ちよつ、タンマイやマジで。」

苦しそうな顔しながら、小さい声で言っているのは、真鍋ケンジだ。こいつとは、中学の時から同じ学校であゝ悪友みたいなもんだ。

「ケンジ、いきなりなんなんだよ？」

俺がなんかこいつにしたつけ？心当たりはない

いや、ある

ちやあるけど……

えーと、まだこの前貸して貰った、ゲーム無くしたとか？

それとも……といういろいろ考えていると。

「あーいいよなあ、おまえは。」と不機嫌な顔をしながら溜息を吐く。

「なにがだよ」

「だつてお前朝から、あの古川と一緒に登校してんだぞ……」

「古川っていったら、女子バスケット部のエースで、校内でもトップクラスの美少女だぜ羨ましすぎるだろうが！！」と声を張り上げる。

「いや、あいつとは幼馴染なだけで、なんでもねーよ」

と溜息まじりに言う。

「もういいおまえなんか」と叫びながら、教室を出てしまった。

「どこ、行くつもりだよ、あいつは、つーかこれからHRだぞ…」

溜息を吐きながら、自分の席に座る。

『キーンコーンカーンコーン』という学校の始まりの音が鳴る。

クラスの担任の小出先生が来た。

「はい、HR始めますよー。出席とりまーす」

「よかったー今日は、欠席した人はいませんね」と歯をのぞかせて微笑んでいる。

（いやいや、先生、ケンジいないから忘れないであげてくれ……）
なんだかケンジのことが可哀想に思えてきた。

というかこの先生はなんかぬけてるんだようなあ……

この前もテストの時に問題用紙じゃなくて違うプリント配つたりしたり。

なんてこと思っていると、

「修学旅行のプリントを配りまーす。」

今回はちゃんと修学旅行のプリントが渡される。

（あーもうすぐ修学旅行だったなあ。）

修学旅行で行くのはニューヨークだ。

俺は海外には行ったことがないのですごい楽しみだ。

グループ分けがケンジとあの松井つてのが気かりだけど……

「それと今日は全校集会なので校庭に集まってください」

「先生、それは明日ですよ。間違えないでください」

と冷たい声で言う。

「ああ、そうだったね、松井さん」

となんだか焦っている先生を見ると、松井つて先生よりも先生らしいと思うってしまう。

松井は生徒会長やクラスのまとめ役で、見た目も可愛いんだが、雰囲気人が寄せ付けけないような感じでなんか怖いんだよな。

「じゃあーHR終わりです。」と言って、HRが終わる。ケンジが勢い良く教室に戻ってきた。

「もうなんかどうでもよくなったよ。」と急に笑顔で言うので、ケンジが少し不気味に思えてしまった。

「それならいいんだけどさ、ところでお前、HRいなかったから修学旅行のプリントもらってないだろ」

ケンジにプリントを渡す。

「あの古川と松井の美少女二人と同じグループになったからなあ」

「まあ、古川はお前とできてるっぽいけどなあ」

少し嫌味っぽく俺に言う。

「いや、出来てないから」

「まあ、俺は修学旅行まで松井にアタックしまくって、修学旅行の夜と一緒に過ごしてそのあとは……」

とぶつぶつなにか言いながら、気持ち悪い顔をしている。

また変な妄想が始まったのか……放って置こう。

（というかあの松井にこいつがアタックできるとは思えないんだけれども。）

なんて、考えていると、早速ケンジが松井に何か話しかけている。

相変わらず行動だけは早いな、アイツ。

「今度の日曜日、空いてないかな？」

「空いてないから」とすぐに答えた。

「じゃあさ……」

「あの用はそれだけ？なら私は職員室に用事があるから」

と少し軽蔑するような目をしながら言って、職員室に行ってしまった。

俺はその様子を見てて、ケンジが可哀想になってしまった。

やっぱり、アイツには松井を落とすことは無理そうだ。

でも松井も、もう少し愛想よくできないのかなあ。

せつかく可愛いのに、あれじゃ怖くて人も近づかないよなあ……

松井といっしょのグループってのは案外疲れそうだなあ。
俺はため息を吐いて、空を見上げる。

修学旅行、一ヶ月前―平和な日常(3)―(前書き)

デート編?みたいなもんです

修学旅行、一ヶ月前―平和な日常(3)―

・三日後・

「はぁぁ」

寝ぼけ眼で瞼を開くと、

目の前にはノートパソコンがあった。

「あー寝落ちしちゃったか」

昨日、次の日が休みだからずっと徹夜でゲームをしていたのだが途中で寝てしまったみたいだ。

今日が学校無くてよかったとなんてのんきに考えながら、携帯を見てみると着信があったみたいだ。

誰からかなぁと着信相手を見ると、

「……」

急いで時計を見る。

時計の針は午後12時30分を回っていた。

やばい、これは緊急事態だ。

そういえばこの前ミキに宿題見せてもらったかわりに買い物に付き合ってたよと約束してたっけ。

俺の記憶に間違えが無ければ今日の12時だったよなぁ。

あれだ、もう急いでもしょうがない。諦めて、言い訳を考えよう。そんな時、『ピンポーン』とチャイムが鳴る。

「……」

嫌な予感がある。居留守を使おうかとも考えたが、

『ピンポーン』

『ピンポーン』

とチャイムがずっと鳴り続けているので、出ない訳にはいかない。というか出ないと多分もっとひどいことになる気がする。

扉を開けに行く。開けた瞬間

「なんで来なかったの？」という言葉聞きながら、顔面にボク

サーも顔負けの左ストレートを貰った。

一瞬走馬灯が見えたような気がする。

「今の左ストレートで、頭がふらふらしながらも必死に言い訳を考えようとしたが、

「言い訳はいいから、だいたいアンタのことだから、どーせ徹夜でゲームでもしてたんでしょ。」

即座に凶星を当てられてしまった。しかしさすが幼なじみだけある。

と思わず感心してしまった。

「ほら、早く仕度してさっさと行くよ。」

ムスツとした表情をしながら言う。

「わかったすぐに仕度するから。」

これ以上怒らせると本当に恐いので急いで仕度をして家を出る。

- 街 -

「ほら、あれ可愛くない？」

とハイテンションで、ウィンドウショッピングを楽しんでいる。

こいつは昔からそうだけど喜怒哀楽が激しいというか感情が顔に出やすいよなあ。

さつきまで、まるで鬼の顔のように怖い顔していたのに今は天使みたいだ。

「この服なんてどう？」

服にはあんまり興味がない俺に言われてもなあ

「いいと思うけど」

「ホントに？ ちょっと試着してくる。」

「ああ、わかった」

とミキは試着室の中に入って行く。

なんか近くで着替えているのを見ると、なんかそわそわしてしまふ。

ミキが試着室から出て来る。

「すげえ、可愛い」

俺は思わず口から言葉がこぼれていた。

ミキがその言葉を聞いて、「ホント？」

と少し顔が赤くなりながら聞いてくる。

「ああ、ホントに」

なんだかこつちも少し恥ずかしくなりながら言う。

「えーと、じゃあこれ買ってくるから」と言ってレジに行ってしまった。

それにしても、インドア派な俺はこういう人が多い所はどうも落ち着かないのだ。

「で、次は何処行く？」

「うーん、少し落ち着きたいからどっか入らない？ほら俺まだ朝からなんにも飯も食べてないしさ」

「まあ、そうね」

俺達は近くのファミレスに入る。

ここのファミレスはあまり人が入ってないみたいで、少しは落ち着けるかな。

なんて思ってたらいいつの話し（愚痴）に長く付き合わされて、落ち着くどころか余計に疲れてしまった。

「じゃあ、またねー」と元気に手を振って帰っていくミキに対して、

何であいつはいつもあんなに元気なんだろうかと思いつながら帰路に就く。

家に帰ると

「なんか、疲れたな……」

小さくため息を吐いて、ベッドに横になった。

修学旅行、一ヶ月前―平和な日常（4）―

――修学旅行まで後一週間――

俺たちは居残りをさせられている。

なぜかというと修学旅行の計画がまだ決まっていなかったのだ。

なんで修学旅行の計画が決まらないのかというと、

NYにいくのだが、

「やっぱり海外の有名ブランドのショップとかゆつくり観て回りたいのよねー」

ミキは少し楽しそうな顔をしながら言う。

ミキは、ゆつくりショッピングを楽しみたいようである。

ケンジは

「やっぱり、NYといえば、自由の女神とか、セントラル・パークとかいつてみたいなあ」

鉄板だよなあと思いながら少し頷く。

松井は

「いやいや、NYだったらブロードウェイも外せないわ」

松井はミュージカルに興味があるみたいだ。

もちろん修学旅行も一応授業なので、行く場所はウォール街などの世界経済を動かしてる場所や、美術館などの歴史に触れる場所だけで、自由時間はそんなにとれないのだ。

なので三人が行きたいと言ってる場所は、時間的に無理なのだ。

まあ、俺としては、ケンジ案に賛成で、ショッピングもミュージカルを見ることが日本で、出来るじゃんと思ってしまうのだが女二人が怖いので何も言わないことにする。

「NYといえば、普通ブロードウェイでしょ？ ゆつくりショッ

ピングなんかしてる時間ないわよ」と松井は静かに言うが、しかしここだけはゆずれないのか、顔は何かが発する寸前のような顔をしていた。

「いやいや海外ブランドを見ないのは、ないでしょ！」ミキは、すこし語気を荒げる。

二人の迫力に圧倒されたのか、「やっぱり、NY行って自由の女神とか見ないのは損だと思うなあ」と、

ケンジは弱々しい声で言った。

しかしいつまでたっても三人の話は平行線である。

なかなか決まらないので、「もうじゃんけんでよくないか？これ決めなきゃ帰れないし、早く決めようぜ、それにじゃんけんなら公平だろ？」と俺が言うと、「それでいいわ」

「まあ、これに勝ってわたしの好きなように決めさせてもらうからね」

「シンイチロウさつさとやろうぜ」

「よし、恨みっこなしだぜ」

結果は、「あの一さつきから、目が怖いんですけど……」

「気のせいだよ……多分」勝者はケンジになった。

松井は、「わかったわ」と一言言ってどっかに行ってしまった。

そんなにブロードウェイ行きたかったのか

ミキは「やっぱりこれはなしってことには……」

『ならないから！』

と俺達三人は同じタイミングで言う。

「だよね……」と残念そうな顔で言う。

二人は渋々あきらめた。

「計画も決まったし、先生に報告してさつさと帰るぞ」

計画が決まると、だんだん具体的な想像（妄想？）が出来て、修学旅行が楽しみになってきた。

「やっぱり、NYは自由の女神だよなあ」なんて独り言を呟きながら家に帰る。

○ ● ○ ● ○ ● ○ ●

家に帰るとノートパソコンでニュースをチェックする。
すると一つの記事が目にとまった。

——JXLのシステムの誤作動?——

不祥事が続いているJXLだが、今度はシステムの誤作動が起こった。

このシステムの誤作動により、米国行きの飛行機が一時的だが、出発しようとした一機と管制塔との連絡が取れなくなったため、運航を延期した。

たしか俺たちが乗る飛行機もJXLだったような気がするなあ。

「まあ、俺たちの時は大丈夫だとは、思っけれど……」と小さく独り言を言いながら、

少し不安になりながら、その記事を閉じる。

あるアングラ系サイトを開く。

そこでは、ハッカー達などが流した情報や違法にアップロードされた動画、ウイルスが流れているサイトである。

暇なのでウイルスの解析でもしてみるか。

と思いながら、適当にウイルスを見つけて、色々なツールを使って、解析を試みる。

「1010101ddfg10a321243dklllj10

……」

といろんな文字が高速で映るので、まるで何かの線のようにパソコンの画面上に映る。

その線が止まった。

結果を見てみると、おそらくサーバーを落とす系統のウイルスみたいである。

それだけなら普通のウイルスなのだが、このウイルスのコア部分だ

けは

— Error —

となつてしまい、ある一部が完全なブラックボックスになつていた。

今までも何回か解析をしたことはあるが、こんな事は初めてである。

他にもいろいろなアプローチで調べてみた。

しかし

「うーん、これも駄目か」

結局、このウイルスについておおまかなことしか分からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912u/>

おそらにハッキング

2011年10月8日10時59分発行